

富士山の遺跡・文化財

吉田口登山道一合五勺の目安とされていた鳥居跡を過ぎるとすぐに登山道の右側に数段に削平された場所に出ます。ここは上吉田の時宗寺院・西念寺塔頭のひとつ定禪院が存在したところです。山梨県文化財に指定される西念寺の薬師仏(釈迦如来立像)は、この定禪院の本尊であったと伝えられます。



「秋乃霊峰」 横山大観

吉田口登山道五合五勺に位置する経ヶ岳には鎌倉時代に日蓮が經典を埋納した場所とする伝説があって、それにちなんで経ヶ岳と称されてきました。大正13年にここから経筒と経巻が発見されました。経筒には10巻の経巻が納められており、のちに1巻が開かれました。法華三部經の結にあたり、頂上三鳥ヶ岳から出土した平安時代の経巻と同じように、朱書で書写されていました。

富士山八葉と懸仏

山頂を八葉の蓮華に見立てる修験系の富士信仰があります。オハチ(お鉢)造りとは、本来は「お八葉造り」のことなのです。内院(噴火口)の大日如来を中心として、外輪の峰々に八仏を配するもので、その認識に基づいて仏像や懸仏が奉納されました。室町時代の文明14年(1482)には「総州菅生庄木佐良津郷」(千葉県木更津市)の信仰者が八枚の懸仏を奉納し、現在、そのうちの二面が出土しています。一面は虚空蔵菩薩像(富士山本宮浅間大社蔵)で、もう一面は不動明王像(富士吉田市歴史民俗博物館蔵)を鑄出したものです。



「富士山巔龍略図」 富岡鉄斎

富士の文学・伝説

富士山の文学

富士山は詩歌・物語・紀行文などにしばしば登場します。奈良時代には福慈岳(『常陸国風土記』)、不尽の高嶺(『万葉集』)などと記されます。平安初期には都良香の「富士山記」(『本朝文粹』)が生まれました。同書は都で記され、都人の富士山に対する認識を示すものですが、実際に見聞した者に取材して記されたようで、頂上の噴火口の記述など具体性をもっています。

『竹取物語』は不死の薬を捨てた山として「その山をふじの山とは名づけける」という山名の語源を説き、『伊勢物語』や『更級日記』も富士山の雪や煙のことを記し、その後の『海道記』や『東関紀行』等の作者が東海道を下る途中で富士山を見て歌を詠んでいます。

富士にまつわる伝説

富士山が周囲の山と高さを競ったという伝説がいくつかあります。例えば、富士山と八ヶ岳に樋を渡して水を流し、どちらに水が流れるかによってその高さを明らかにしたという伝承です。

これとは別に、富士山の出現に関する伝説もあります。孝靈天皇5年に、一夜にして大地が裂け大湖となって近江の琵琶湖ができ、そのときの土が大山となったので、もっこで運んできたのが富士山で、こぼれた土が近江の三上山だとする話です。

江戸時代の『甲斐国志』には、北口本宮富士浅間神社の背後にある大塚山は、日本武尊が東征の帰りに富士山を選擇したところだと記されます。

『日本靈異記』には伊豆大島に流された役行者(富士山を開山したといわれています)は昼は島にいますが、夜は富士の岳に行って修行したことが記されています。また27歳の聖徳太子が甲斐の黒駒に乗って富士山に登ったと記され、「聖徳太子絵伝」には富士山に馬で飛上る姿が描かれています。



「聖徳太子絵伝」の一部(正福寺蔵)



「冬乃霊峰」 横山大観

富士山クイズ

A5: ①本栖湖

富士山は五十銭札や五百円札など、古くから紙幣のデザインとして用いられています。2004年11月から流通している千円札には、1984年から流通していた旧五千円札と同じ、写真家の岡田紅陽が1936年初冬に本栖湖北岸の山の上から撮影した迎き富士が基となっています。